

研究主題「支援児が個性や能力を発揮するための連続的・計画的な支援の充実 －『つなぎの共通理解シート』を活用した教職員間の共通理解や連携の強化－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
日野市立第七幼稚園 教諭 榎本 恭子

第1 研究のねらい

都内の多くの幼稚園では、発達障害と考えられる特別な支援が必要な幼児（以下、「支援児」と表記。）の在籍が増えており、支援児に対する支援体制を専門家の力を借りながら強化したり、園内の教職員間で共通理解や連携を図ったりしている。しかし、支援児が増えてきたことで個に応じた対応が難しく、教職員同士の支援児に対する共通理解や連携が不十分であったり、適切な支援を行えなかったりするなど協働体制に課題があった。

幼稚園教育要領（平成29年3月告示）の「幼稚園運営上の留意事項」には、「園長の方針の下に、園務分掌に基づき、教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、教育課程や指導の改善を図るものとする。」とある。このように、園内の教職員間の協働体制をつくるのが大切であり、そのことは支援児に対する支援を充実させることにつながると考える。

そこで、本研究では、園内の教職員間の共通理解や連携を強化し、支援児に対する支援を充実させることによって、支援児が集団の中で自分の個性や能力を発揮できるようにすることをねらいとする。具体的な方策として、教職員間の共通理解や連携を強化するためのツール「つなぎの共通理解シート」を開発し、その活用方法について研究する。

第2 研究仮説

「つなぎの共通理解シート」を活用して、園内の教職員間の共通理解や連携を強化し、支援児に対する連続的・計画的な支援を充実することによって、支援児が集団の中でよりよく自分の個性や能力を発揮するであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

先行文献や資料より、幼稚園での特別支援教育に関する現状とともに、教職員間の協働体制について研究し、下記の点が確認できた。

- ・ 支援児に対応することの多い職員（以下「支援員」と表記。）については、区市ごとに配置方法や勤務体制などが異なる。
- ・ 幼稚園では、特別支援教育コーディネーターのほとんどが学級担任を兼務しているため、コーディネーターの業務に専念しにくい現状がある。
- ・ 学級担任の役割として期待されていることは、園長や特別支援教育コーディネーターとの相談の下に、支援児の感じている困難さや、発達や障害の特性に応じて支援すること、支援児と周囲の園児との交流を相互に促すこと、支援児の実態を園全体に知らせて共通理解を図ること、などである。

2 調査研究

教職員間の共通理解や連携における工夫や課題などの現状について、都内公立幼稚園3園で調査した。園長3名と学級担任9名にはインタビューで、支援員13名には、選択技法によるアンケートを行った。

(1) 支援児に対する支援体制の充実を図る上での現状と課題について

支援児に対する支援体制を充実させるために行っていることとして、どの園長も「教職員の共通理解を図る会議の実施」を挙げた。特に、園内研究の時間を活用するなどして、共通理解を図る時間を捻出していた。一方、課題としては「教職員同士の十分な共通理解」と「教職員の指導力の育成」を挙げていた。また、支援児に対する共通理解を図る時間を現状以上に増やすことが困難であることも分かった。

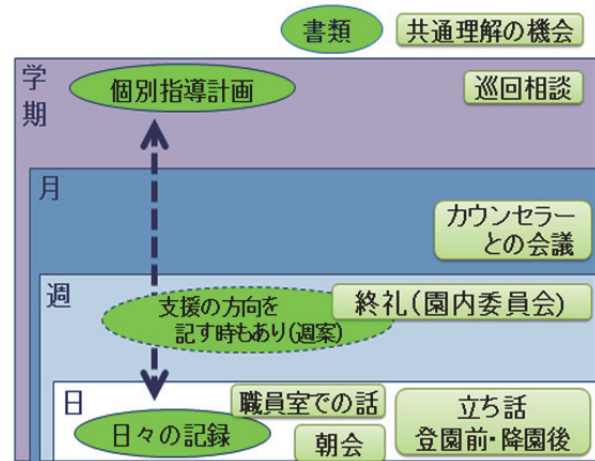
(2) 教職員間の共通理解について

全ての学級担任は、支援員との共通理解ができていると回答していた。また、支援児の担当以外の教職員との共通理解についても、学級担任9名中5名が肯定的に回答していた。一方で、その内容は支援児の様子を報告することにとどまっており、学級担任9名中7名が支援児に対する理解を深めたり、就学を見通した連続的・計画的な支援を考えたりするような機会が足りないと回答していた。

(3) 支援児に関する書類について

支援児に関する書類としては、個別の教育支援計画と個別指導計画、日々の記録があるが、その中間をつなぐ書類は特に決められたものがなく、記録の仕方も教職員それぞれに任されていることが分かった(図1)。また、その個別の教育支援計画や個別指導計画の活用については、各区市、各園によって実態は様々であり、教職員間の共通理解を図る上での活用についても同様の状況であった。

図1 支援児に関する書類と共通理解の機会



(4) 考察

各園では、限られた時間の中で、教職員で話し合い、支援児に対する共通理解を図る工夫をしているが、その話し合いの内容を記録する書類が整備されていない。また、日々の記録が中期・長期の個別指導計画に生かされるまでの期間は、担任個々がそれぞれの方法で記録したり記憶に頼っていたりしているといった実状が分かった。しかし、現状においては支援児に対する共通理解を図る時間を増やすことは難しく、限られた時間の中で、支援児に対する理解を深めたり、就学を見通した連続的・計画的な支援を考えたりするためには、効果的で効率的なツールが必要であることが分かった。

このことより、現状を改善していけるような「つなぎの共通理解シート」を開発することが、課題を解決する方法の一つであると考えた。

3 開発研究

(1) 「つなぎの共通理解シート」の開発

調査研究を踏まえ、限られた時間の中で、支援児に対する理解を深めたり、連続的・計画的な支援を考えたりするための効果的で効率的なツールとして「日々の記録と個別指導計画をつなぐ記録シート」及び「教職員で考え合うためのシート」からなる「つなぎの共通理解シート」を開発した。

ア 「日々の記録と個別指導計画をつなぎ記録シート」について

「日々の記録と個別指導計画をつなぎ記録シート」は、教職員間での話し合いを簡潔に記録するシートである。個別指導計画のねらいから、教職員が支援児の、集団の中で自分の個性や能力を発揮する姿（以下「望む姿」と表記。）を想定し、「望む姿」やその姿を引き出す「手だて」に焦点を絞って記録する。その記録で中期・長期の計画である個別指導計画と日々の記録の間をつなぐことにより、連続的な支援を意識できるようにした。また、1学期ごとに紙面一枚程度となるようにまとめて記録することで、視覚的に支援児の変化を捉え、先を見通した計画的な支援につなげやすくなると考えた。

イ 「教職員で考え合うためのシート」について

「教職員で考え合うためのシート」は、園内の教職員の支援児に対する様々な見方や手だてを集め、支援児への理解を深めたり支援の幅を広げたりするシートである。支援児に対する共通理解とともに支援の方向を教職員が共有し、一貫した指導を行うことで、教職員間での連続的・計画的な支援の充実を図る。教職員同士で支援児の見方や手だて等を付箋に記録し、蓄積できるようにした。

(2) 「つなぎの共通理解シート」の活用について

上記二つの「つなぎの共通理解シート」は、支援児に対する共通理解を図る話し合いや会議のときに記録することを基本とし、シート作成のための新たな時間を捻出せずに活用できるようにした。これらのシートをファイル等にまとめ、教職員がいつでも職員室でシートを見ることで、支援児に対する共通理解や連携の強化を図ることが期待できる。

支援児が多い複数学級園では、学年ごとに会議し、園長や特別支援教育コーディネーターがシートを活用しながら学年間をつなぐなど、会議の設定を園の現状に合わせて工夫することで、より効果的で効率的な共通理解や連携の強化が期待できる。

4 仮説の検証

「つなぎの共通理解シート」を活用し、学級担任と支援員の意識の変容とともに、検証保育での支援児の変容を追い、仮説の検証を行った。

表1 検証保育での支援児の姿

<p>望む姿 ①ルールを守りながら、楽しんでゲームに参加し続ける。 ②友達と一緒にゲームを行う楽しさを感じる。 ②様々な友達と関わることを楽しむ。 ③ゲームのルールを理解し、守ろうとしながら参加する。</p>	<p>(シートの記録と関連した) 担任の意図 →手だて</p>			
<p>第1回 支援児の姿 (9月11日実施) ①自分から動いて最後まで参加していた。友達と一緒にゲームを行う楽しさを感じていた。 ②同じ表示を見せ合う、友達と集まることなど関わる楽しさを感じていた。 ③スタートまで表示を見ないルールは、分かっていたが、守りにつくかった。</p>	<p>意欲をもって参加できるようにする。 ⇒引き続き、好きなキャラクターを生かす。 更に周りの園児と関わらせる。 ⇒よく見ないと分かりにくい表示にする。 本児も守れるようにする。 ⇒表示を裏返す。</p>	<p>第2回 支援児の姿 (10月17日実施) ①前回のことを覚えていて、参加する意欲が見られた。最後まで参加していた。 ②「お願いします。」と一言が少なく、友達に関わりにくそうであった。 ②二人集まると、相手に任せてしまい、自分から友達を探さないで歩いていた。 ③表示が裏返っていたことで、ルールを守って、スタートまで表示を見ないでいられた。</p>	<p>支援児が自分から友達を探すようにする。 ⇒二人組で集まる。 ⇒組む相手を配慮する。 ⇒挨拶の代わりにやり方にする。 支援児に合わせて活動やルールを設定するだけでなく、支援児が合わせる部分もつくる。 ⇒速さを競うルールも取り入れる。</p>	<p>第3回 支援児の姿 (11月14日実施) ①キャラクターがきっかけだが、最後まで参加し続けていた。速さを競うルールを入れても、一番にこだわらずに参加していた。 ②友達に働きかける姿が増えた。好きな友達をまねてゲームが始まるのを待ったり、集まった友達と再びキャラクターを見せ合っただけでほえんだりしていた。 ③速さを競うルールを理解していた。3回戦目は最後の方で遅くなったが、諦めることなく参加し続けていた。</p>

※①は心情・意欲・態度、②は対人関係・社会性、③は言葉・認識に関する内容。

(1) 検証保育（2年保育年長5歳児学級：平成29年9月11日・10月17日・11月14日実施）

支援児の「望む姿」を引き出すために有効な活動として、仲間集めのゲームを設定し、実施した。「つなぎの共通理解シート」を活用しながら、活動の設定理由や支援の意図を教職員間で共通理解した。3回の検証保育において、支援児、学級担任及び支援員の姿を記録し、「つなぎの共通理解シート」の教職員の記録との関連をまとめた。検証保育では、表1のような支援児の姿や「つなぎの共通理解シート」の記録と関連した学級担任の意図や手だてが見られた。支援児は、①心情・意欲・態度に関する姿として、好きなキャラクターがきっかけで、ゲームに楽しんで参加していた。②対人関係・社会性に関する姿として、自分から友達に関わったり、友達との関わりを楽しんだりしていた。③言葉・認識に関する姿として、ゲームのルールを受け入れ、諦めることなく参加し続けていた。これらの姿は「望む姿」と一致しており、検証保育場面において、支援児の個性や能力が発揮されていた。

(2) 教職員の共通理解や連携に関する意識の変容について

学級担任と支援員にチェックシート（支援等に対する自己評価）と聞き取りを実施し、「つなぎの共通理解シート」の活用により、支援児に対する共通理解や連携に関する意識の変容があったかを調査した。チェックシートでは、数値に大きな変化は見られなかった。聞き取りでは、学級担任から「他の教員から手だてがもらえ、支援児の捉え方や考え方が広がった。」、「他の教職員に共通理解してもらうことによって、気持ち楽になった。」、支援員からは「学級担任の意図が分かり、支援しやすかった。」「『望む姿』があることで臨機応変な支援をしやすくなった。」という声が挙がった。これらのことから、学級担任と支援員の支援児に対する理解が深まり、支援の幅が広がったこと、学級担任と支援員とで支援児に対する共通理解と支援の方向の共有ができたこと、また、そのことにより、学級担任や支援員が安心感や自信をもてたことがうかがえる。さらに、支援児に対する共通理解や連携が強化され、支援の充実につながった。

第4 研究の成果

「つなぎの共通理解シート」を活用することによって、「望む姿」とともに支援の方向が明確になり、学級担任と支援員で支援児に対する共通理解や支援の方向の共有を効果的で効率的に行えることが確かめられた。よって、「つなぎの共通理解シート」は、教職員間の共通理解や連携を強化する有用な方法の一つであると言える。また、「つなぎの共通理解シート」を活用して、教職員間の共通理解や連携を強化し、支援児に対する連続的・計画的な支援の充実を図ることによって、支援児が集団の中でよりよく自分の個性や能力を発揮することが、検証保育場面で確かめられた。さらに、「つなぎの共通理解シート」に記録し、それを基に意見を出し合ったり手だてを整理・分類したりすることで、各教職員の支援児に対する理解が進むとともに、他児に対してもより深く理解しようとし、観察力が高まるという副次的な成果もあった。

第5 今後の課題

「つなぎの共通理解シート」が活用しやすくなるよう改善を重ねていく。各園の実状に合わせて、その活用方法や、教職員間の協働体制を確立するとともに、保護者や外部専門家、療育機関との連携にどのように活用できるか、さらに検討していく。また、「つなぎの共通理解シート」を活用することで、教職員の指導力の向上にもつなげることができるよう、事例から検討していきたい。